
機密給仕～シークレットサービス～？

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機密給仕〜シークレットサービス〜？

【Nコード】

N85680

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

1950年代戦後日本。合法麻薬による記憶改ざんが認められた世界で、GHQの秘密組織『機密給仕』が水面下に仕事を遂行する。第二弾、リク誘拐編。

？ 人の命は金で買える？　ブラックマネー
？ リクの戸惑い

どちらか殺すことが正しい選択だった。リクは俺とホノカの2人とも救ってしまった。代わりに禁じ手の執行官殺しをした。リクの迷いが俺まで迷わせた話だ。きっかけは些細なこと、いつだってそう
だろ。

「僕とホノカさんのどっちが好きなの？」

リクは俺にふざけたことを聞いてきた。ホノカは色々あっても幼馴染止まりで、リクは家の居候だと真面目ぶって逃げた。

男は辛いよ。このときリクが新しい仕事で動いていたと知っていたら、リクに安心させる甘い言葉をあげたのにな。俺はうすらトンカチだ。それ以上も以下もないと付け加えたい。

？ 事情聴取

リクが帰ってこない。もう夜の11時を時計の針は回っていた。流石にホノカが心配し出した。彼女は警察に届けようとまで言い出したが、俺は能天気な夜遅いし朝にしよう、とさっさと2階に上がり寝てしまった。

決してリクのことが心配にならなかったと言ったら嘘かもしれない。ただバカな俺から睡魔が消えなかっただけと信じている。

朝になってホノカは門前に立つ警官に『事情聴取』を急に迫られた。吉岡陸という少年を探してほしいとの通報でこの近辺に目撃情報があったらしくこうして住民に聞き込みをしているとのことだった。

昨日の今日で偶然にも程がある。ホノカは警官を信用せず、首を傾げて曖昧に返事をした。元ライブラリアンだけあって彼女の口は堅い。警官は舌打ちをしてホノカを殴って気絶させた。

偽物の警官にホノカが襲われたとき、俺は得体のしれない予感で目が覚めた。

2階の窓辺に中世のメイド服を着た女が座っていた。はて、これは夢か現か。女は寝ぼけた俺に有無を言わせなかった。

「悪いことは致しません。私たちと御同行願います」

庭を眺める視線の先に警官風の男がホノカを肩に抱えて立っている。2階から飛び降りてみると挑発されたらやりかねない状況だったが、メイドに遮られて断念した。頭が急速に冷める。くそ野郎め。

俺は家の外に止めていた黒塗りの外車まで連れていかれ、更にそこで目隠しをされた。どこに向かっているか全くわからない。

暗闇から解放されたとき、そこは外国製の装飾が施された椅子と机がある会議室だった。警官は黒の皮ジャケットに同じ色のジーンズ、たぶんはやりのロッカースタイルだ。長身の彼は見てくれから外人のような威圧感がある。

「俺は気が短い。単刀直入に言う。リクを知っているだろう。どこへやった」

「それは俺も…その…」

奴は椅子を蹴りキレた。本当に気が短いようだ。俺にあーとかうーとか誤魔化す暇はないらしい。

「あんたは犯罪者だ。それも国家転覆を狙ったな。俺はあんたに時間を与えているほど暇はない」

「わかった。言うから落ち着け。リクとは昨日から音信不通だ。どこにもやってない。警察に届けようとしたくらいだ」

「その必要はない」

メイドがお茶を入れる。その間俺は手も付かずビビってしまい、続く男の言葉を待っていた。皮ジャケは黙ってお茶のカップを啜る。メイドは場違いな微笑みを浮かべる。

「坊っ…いえ、佐島さん。ティータイムは優雅になさってください。そこにいらつしやる彼は西園寺遼介。サイオンジリョウスケ私は西園寺家に仕えるメイドの六郷和沙です。ロクゴウカサ先程サイオンジが申しました通り、警察への連絡は不要に御座います。私たちはG H Qの職員で治外法権ですから」

俺はようやく冷静にリクの失踪を受け入れた。メイドカフェ効果。サイオンジは目を細めた。

「そういうことだ。貴様に拷問をかけてリクの居場所を吐かせようとしたが不発らしい」

ホノカがようやく目を覚ました。俺より肝が据わった彼女が、陰湿なこの空気を裂いて言った。

「3日前リクさんは何か調べ物をしていましたよ。それで昨日マサ

カドに話しかけたきり帰っていません」

しれっと俺のせいにする辺り、ホノカがもうライブラリアンでない証拠だ。規則的な守りがあった昔と違って可愛げない。だけど、サイオンジとメイドのカズサの興味が俺からホノカに移って俺はようやく安心した。ホノカへの尋問に変わる。

「リクは何を調べていた？」

「くすり、それも製薬企業の手です。ほら、TVのCMでやっている『切り傷にはサイエー軟膏』」

TVのCMって何度も見ると洗脳されたように覚えてしまうような。治癒力、抗菌力、販売力の3A、^{スリーエース}切り傷にはサイエー軟膏ってね。サイオンジは手で制した。

「彩栄の代表取締役のスミクラをマークしていたのか。財閥解体で合麻の執行を逃れた奴は、執行官が使う企業を買収したと聞いていた。そのスミクラもさっき執行官に手渡したとの上官の話だ。これで奴は人生破滅だな」

サイオンジは他人の不幸を鼻で笑った。

おいおい、あんたらリクの情報が欲しいんだろ。なぜスミクラからリクの情報を引き出そうとしない。サイオンジは詰まらない顔をした。

「スミクラは民主化の敵だ。さつさと片付けるに限る」

リクは被害者なんだ。奴の陰謀を明かすのが先だろう。もしかして執行官の狙いは中立のあんたたちの内部分裂かもしれないぞ。

「流石です、坊っちゃんはお目の付けどころが違う」

何故かそれはサイオンジではなくて、俺に対して誉めて言っているように聞こえた。メイドの空耳か。俺はリクがピンチなのにサイオンジを僻んでいるのか、情けない。

結局サイオンジは俺の言葉に返事がなかった。悩んでいるようだったのでしてやったりだ。

ホノカは断りなくさつさと軟禁を抜け出したので俺も後に従って大学へ向かった。どうやら軟禁されていた場所は皇居のお堀の側にあ

るビルだったらしい。

まあどうでもいいことだが、俺はサイオンジとは一生縁がない生活をした。初対面で犬猿の仲確定だ。

？メイドの土産

その日は講義内容そっちのけで、教授の最先端過ぎて誰もわからない話は聞き流し、リクの安否だけが気がかりだった。どこにいるのだろう。ヤバい橋を渡って失敗したのだろうか。

気付けばもう放課後だ。西日が差す中、俺は自分の無力さを知りとぼとぼ歩いていた。後ろから元監視者がやってきたようだ。

「リクちゃんのために悩んでくれてありがとう、マサカド。あつ私、先に帰るね」

ホノカは迷いなく帰って行く。もしかしたら今日の特売日で近所のスーパーに直行するのかもしれない。ホノカは空気を讀みたがる。

校門の前で警備員のおっさんと親しげに話すヴィクトリア朝の遺物といえるフリルの付いた服のカズサを発見した。ホノカの奴、俺に面倒を押し付けて逃げたな。面倒な展開。でも癪癪サイオンジじゃないだけマシか。

服装はふざけているが、きりつとした凛々しい感じだ。でも良くも悪くも不審者だ。警備員も仕方なく職業質問をかけたのだろつよ。

ふつうはハウスキーパーと言えばそれで終わり。しかし、世間話までする度胸は下賤の者じゃない。カズサの人間性の深さだろつ。メイドオーラが違う。カズサは俺に気付き一礼をした。

「お帰りなさいませ、坊っちゃん。勤勉な姿、大変お疲れ様です」

いや呆けて勉強どころでなかった。それより俺は明治の文豪の主人公みたいな名前で呼ばれたのは生まれてこの方ない。そもそも俺たと俺の接点が謎のままだ。

「それは長くなります。場所を変えましょう」

あいあいさー。それじゃ俺の家で聞こう。仮にあんたはサイオンジの手先って考えとこう。カズサと家路を歩きながら俺は話をする。

「先程、サイオンジ様にお暇を頂きました。元々義理も無い方ですし、坊っちゃんのお気に召すことでは御座いません」

「ふーん、じゃあ俺の家の居候になりたい訳か」

「先程ホノカ様よりお許しは得ております。それより私の使命は貴方様の警護に御座います。」

皮肉も笑顔でスルー。メイド歴が長いようだ。ちゃんと段取り踏んでいた。俺の警護ね、照れくさいやら面倒くさい。

そうこうしている内に俺はメイドから午後の紅茶タイムを受けていた。至れり尽くせりだが、ここはいつもの俺の家だ。カズサの話は難しくなかったが、理解し難かった。ついに来た俺の過去についてだ。

マサカドは先の大戦のA級戦犯で処刑された九鬼忠平首相の跡取り息子で、そのまんま本姓はクキだそうだ。クキタダヒラ

それに朝鮮戦争で合麻法の薬の人体実験が行われて壊滅した日本解放軍の生き残りらしい。

記憶を失い廃人となったマサカドはカズサ達の献身的な介護で復活した。廃人期間に処刑された父の敵打ちでサイオンジの言った通り国家転覆をしようと画策した。計画直前で犯行が露呈し、再び合麻法の餌食となった。

時代はレッドパージでGHQも政府も厳戒態勢だった。そんなたいそうな作戦がばれないはずがない。馬鹿な俺。それが特に過去に思

い入れのない俺の感想だ。血で血を洗う逆コースを目指しても無理に決まっている。

だけどカズサは身を乗り出して熱っぽくいう。対して俺は圧倒されて引き気味だ。

「馬鹿があれば大きな計画を動かせたはずが御座いません。あと少しのところでした。それに賛同した仲間は見事全員逃がしたのですよ」

つまり俺一人危険人物として記憶を飛ばされ、仲間はみんな助かったらしい。

微笑ましいチーム愛だ。胡散臭さは否めないけどな。突然ひらめいた。実は馬鹿と天才は紙一重かもしれない。

「俺の身内でリクのこと助けないか。サイオンジに冷静さがないってことはG H Qには人海戦術する余裕がないんだろう。スミクラを執行官から引き離して取引をする」

流石ですとカズサは乗り気だ。カズサの猫被り説がばれるのはこの後なんだ。ホノカと違って武闘派な一面がちらりと見えた。

それは家の前にとんでもないごろつき共をカズサが呼んだところから始まる。GHQの車とは違った貫禄の黒塗りのごつい外車から降りてきた厳つい顔の背広の面子。俗にいうカタギの人たちだ。

恐がってホノカはネズミのように奥の方へ逃げた。俺も全部放り投げて逃げたい。だが一番偉そうなオールバックの旦那に頭を下げられ留まってしまった。

「坊っちゃん、お帰りなさいませ。カズサから聞きました。スミクラを拉致する手はずは整っております」

えっと、すみませんがどちら様ですか。極度の緊張のあまり失禁しそうだ。いつの間にか黒のスーツ姿に着替えたカズサがいた。

「この方は新関東連合のときの同士で琴丘^{コトオカ}さん。今は裏で華堂会の組長です」

昔の俺は余程の阿呆だ。こんな人と手を組んでいたなんて手段選らば無さすぎる。組長さんの態度を見る限り、俺がドラム缶にコンクリート詰めで東京湾に沈められることはなさそうだ。

カズサが俺に記憶が戻ってないことを告げると彼は無礼を深く詫びた。いえ、お構いなく俺は俺ですから。

あとは情報屋として動いているサイオンジの電話待ちになった。メイドはメイド服でなくとも手はずを整える。

「てつきりサイオンジと絶交して家に来たと思っていたよ」

「いいえ、私は坊っちゃん一筋ですから」

カタギの方々も笑う。場違いな告白。色恋沙汰の話もリクのときの方が健全だ。返事だけど俺の口の中に水分がないからどうだろうな。

俺が告白で気を失っていると家の黒電話が鳴った。受話器越しにカズサはうんうんと頷く。俺は死んでもサイオンジと電話で話したくない。死んだら話せないけどね。

「足が捕まりました。スミクラは護送車の中のことです。叩き潰しましょう」

おうつと掛け声。いや、叩き潰さずにせめてスミクラの口が聞けるくらいにしてください。

やはり本物の手際の良さは違った。護送車を数台で挟み撃ちにして強引にタイヤを停止させた。慌てて降りた執行官を数秒で制圧し、

救急車が付く頃には腕や脚があらぬ方向に曲がった奴らが数人転がるだけだ。俺たちはスミクラのおっさんを連行し、その場から消える。

生ぬるい方法じゃ口を割らないと踏んだ俺は本職に任せた。組長さんは手下に爆薬の付いた椅子を用意させ、スミクラをそこに拘束した。おっかない。

「このわしにこんなことして、ただで済む…」

「口の利き方に気いつけいや。おっさん立場わかつとんか」

どすの効いた声とエナメルの靴の蹴り。さらに爆弾の導火線にジツポで火を着けた。

「待ってくれ、私が悪かった。金は払う、命だけは助けてくれえ」

組長さんは俺に眼光の鋭い視線を送ってきた。俺は軽く首を縦に振る。もちろんただで逃がすつもりはないけどな。一度鎮火。

「その少年は自分が雇った用心棒がどこかへ連れていった」

ここでリクの消息は絶えるか。どうするか考えようとした瞬間、カズサがぶちぎれた。

「てめえはここで死ぬ。うちの組の者がてめえの会社の薬でやられてんだ。ここで落とし前つけな」

導火線再び着火。メイドのときと性格が180度回転したカタギの顔。恐い顔のカズサは言葉で説明できないほど危険だ。

スミクラはじよぼじよぼと失禁した。大の大人にこれ以上の辱めはない。俺は首を横に振った。もういいだろう。カズサは唾を吐き捨て、煙草の吸い殻のように足で導火線を踏み消した。どこかの倉庫の人、何度も床を汚して申し訳ない。

「坊っちゃんの度量が海より深くてよかったなあ」

スミクラは壊れた人形のようにカクカク頷く。俺はクキ姓で名乗っておいた。スミクラはやはり恐れ慄いた。国家転覆の名は金の亡者のこのおっさんに良い薬になったんじゃないか。

？火傷男の来訪

放心状態のスミクラを放置し、カズサと組長は夜の街へそのまま飲みに行った。俺は丁重にお断りし手ぶらで帰宅した。ホノ力は困った顔で俺を出迎えた。どうした。

「これ、右頬に火傷痕がある男があんたに渡して欲しいってさ」

封筒。差し出し人不明。宛名がなんと「クキマサカド様」となっていた。ホノカの監視がなくなったとはいえクキ姓で名乗ったのはさつきが始めてだ。

まるで見計らったかのようなタイミングだ。俺は監視されているように背筋がぞつとした。ホノカも恐ろしくてこの手紙爆弾処理に困っていたらしい。俺の身を案じているその気持ちで十分だ。俺は封を破った。

中から出てきたモノクロ写真に顔が固まる。手錠に繋がれ目を閉じたままぐったり座り込むリク。裏面には『一人で来い』とあり、ご丁寧に住所が記載されていた。ホノカが心配そうに俺の顔を覗く。

「俺、行ってくるよ」

俺が今、ぎこちない笑みになっていること間違いない。今日は危ない橋を渡り続けた。ホノカは無言で頷いた。

大通りでタクシーを拾い、どこか知らない新築のビルに着いた。ここは最近の土地開発で建てられた完成間近のビルだ。そこに緑のコートを着た右頬に火傷の痕がある男が立っていた。目差し帽のせいで表情がわかりにくい。意外な一言から始まった。

「クキマサカド、久しぶりだ。だが俺のことは忘れただろう」

知り合いだったのかもしれない。俺はいつものくせで熱くならないようにした。リクの命がかかっている。

「リクは無事なんだよな」

「ククク…俺の本当の目的はあんなガキでないが、無事だ。目的は最初からお前だ、お前」

俺は変な奴からどんどんラブコールを受ける。まともな女性からはない。それは残念だが、俺は声を抑えて言った。クールになれよ、俺。

「そうか。それなら、リクを今すぐ返せ」

「良い。それならば、あのガキにいくら出す」

俺はリクを金で扱われ我慢ならなくなった。好きに言わせればつけ上がりやがって。

「金でヒトの命は買えない。リクは俺の大切な家族だ、今すぐ返せ！」

矛盾も承知だ。なんならこいつと刺し違えてもいい。火傷男は腹を抱え大爆笑した。堰を切ったような不気味な笑い声が鉄筋コンクリートの壁に反響する。

「そうか、それでいい。それがお前らしい。だがこれから言うことが取引の条件だ。さつさと記憶を取り戻せ。マサカド、約束は忘れるなよ」

そういうと火傷男は向こうを指さした。そこに壁にもたれたリクが座って寝ていた。俺がリクの下に駆け寄るのを見届けずに火傷男は去って行った。ややあってリクは目を覚ました。

「ん…マサカドがやっぱり来てくれたんだね」

「馬鹿かお前、仕事で失敗するならもつと自分の命を大切にしろよ……」

「泣いてくれるの？」

リクは薄らと疲労が見える目で力なく笑った。五月蠅い。俺はリクの口を口で塞いだ。黙ってリクは目を閉じて俺に応じた。

機密給仕？

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8568o/>

機密給仕～シークレットサービス～？

2011年1月20日04時31分発行